論文要旨

幼児の食事の意義理解の発達過程
- 幼児期の食事経験の違いによる検討 -

瀬尾　知子

本研究は､幼児の食事経験が幼児の食事の意義理解の発達過程に与える影響を､母親への質問紙調査、幼稚園、保育所といった園での食事場面の観察、幼児期の子どもへの選択課題実験など、様々な方法で採集されたデータをもとに明らかにすることを試みたものである。

論文は、第１章で先行研究の概観と本研究で明らかにする問題について述べた。続く第２章では、第１研究として、母親の養育態度と、社会経済的地位や母親の食意識・食事のしつけ方の関連を明らかにし、第２研究では、幼稚園や保育所といった園での食事場面において、保育者がどのような言語的働きかけをしているのか、弁当実施の幼稚園と給食実施の保育所といった違いから比較検討をし、明らかにした。第３ 章では、幼児の食事の生物学的意義理解に焦点をあてて研究をおこった。第３研究として、母親の食意識の違いが幼児の食事の生物学的意義理解の発達過程に影響を与えるのか、母親の食意識に関する質問紙調査と幼児を対象とした選択課題実験により検討した。第４研究では、園での食事形態の違いにより、幼児の食事の意義理解の発達過程に影響を与えるのか、弁当実施の幼稚園の通う子どもと給食実施の保育所に通う子どもを対象に選択課題実験をおこない検討した。そして、第３研究と第４研究の結果から、幼児期の食事経験の違いは幼児の食事の生物学的意義理解の発達過程に影響を及ぼすのか明らかにした。第４章では、幼児の食事の社会的意義理解に焦点をあてて研究をおこなった。第５の研究として、家族と一緒に食事をしているか、していないかといった家庭での食事状況と幼児の食事の社会的意義理解の関連について幼児を対象とした選択課題実験から検討した。第６研究として、母親の食意識や養育態度の違いと幼児の食事の社会的意義理解の関連について研究５と同様に幼児への選択課題実験を実施し検討した。さらに第７研究として、幼稚園に通う子どもと保育所に通う子どもでは食事の社会的意義理解が異なるのか検討をおこなった。そして第５研究、第６研究、第７研究の結果をふまえて、幼児期の食事経験は幼児の社会的意義理解の発達過程に与える影響を明らかにした。

第５章では、これら７つの研究をふまえて導き出された知見をもとにして、第１に、幼児期の食事経験は，母親の養育態度の違いや，食事形態によって異なること、第２に、家庭や園での食事経験の違いは，幼児の食事の生物学的意義理解に影響を与えること、第３に、園での食事経験の違いは幼児の食事の社会的意義理解に影響を与えないが，家庭での食事経験は幼児の食事の社会的意義理解に影響を与えること、第４に、なぜ成長や健康のために食事をすることが必要なのか，共食をするのかといった食事の意義を理解する際には，子どもに対して母親や保育者が食事に関する情報をどのように伝えるのか、社会的慣習や価値観，食事経験が影響を与えることについて総合的に考察した。

本研究の意義は、第１に、これまで明らかにされていなかった、幼児の食事の意義理解の発達過程を明らかにしたことである。食事の意義理解は、因果的な説明ができる４歳になると明瞭になり，さらに５歳になるとより精緻化されることを示した。第２に、食事の意義理解の発達過程を，幼児の食事経験から明らかにしたことである。本研究では、食事の生物学的意義の理解には，家庭と園での食事経験が影響を与えるが，食事の社会的意義の理解には園での食事経験は影響を与えないことを示した。さらに母親の食事場面の働きかけには，社会経済的地位や母親の食意識が，園での食事場面の保育者の働きかけには園での食事形態が反映されている可能性を示すことができ、幼児期の食に関する研究を新しい視点から拡張するのに寄与した。第３に、幼児が共食をどのように捉えているのかといった意義認識の側面から検討したことである。本研究は、共食の機会をもつことと母親の関わりが幼児の社会的意義理解に影響を与えることを示した。第４に、家庭や園での食事場面は幼児にとって学習の機会となっており、日々の食事場面におけるコミュニケーションを通じた食育の重要性を示したことである。

本研究で幼児の食事の意義理解の発達過程を食事経験の違いから明らかにしたことは、今後の幼児の食育を上で重要な知見を示したといえる。